

AAR News

6月20日は世界難民の日

きっと、できることがある

100人に1人は難民です

2022年、世界の難民・国内避難民が初めて1億人を超えました(出典:UNHCR)。世界人口の1%以上の人々が、紛争や迫害で家を追われ、難民・国内避難民として生活しています。ウクライナでの未曾有の人道危機によって、その数は増え続けています。ニュースで目にする映像は、私たち日本人にとっても他人事ではありません。世界に目を向けると、タリバンが実権を掌握するアフガニスタンでは政情不安が続く、シリアでは紛争発生から11年経っても解決の糸口は見えず、ミャンマーの武力弾圧を逃れたロヒンギャ難民は5年を経てもキャンプで暮らしています。これらの問題は解決しないまま、そして難民の苦しみも残されたままです。

支援現場で私たちが出会った多くの難民は「世界から忘れられるのが怖い」と口にします。まず関心を持つこと、何が起きているかを知ること、そして、今できることから一歩を踏み出すこと。それが世界を変える力につながっていきます。

6月20日「世界難民の日」をきっかけに、難民問題の現状、難民の人々はどうなことを思い願っているのか、耳を傾けてみませんか?世界中の難民が私たちの支援を待っています。

知る・広げる

「難民と呼ばれるけれど、他のみんなと何も変わらないよ」。そう話す南スーダン難民男性へのインタビュー動画を公開しています。ハッシュタグ「#難民を忘れない」や「#世界難民の日」をつけてSNSで投稿して周りの人につないでいただくことで、支援の輪が広がります。動画を見た感想もお待ちしております。



動画はこちらから

#難民を忘れない
#世界難民の日

オンラインイベントに参加する

ミャンマーのイスラム少数民族ロヒンギャが武力弾圧を逃れ、隣国バングラデシュに大量流入して間もなく5年。昨年2月のクーデター後のミャンマー情勢と合わせてロヒンギャ難民問題を考えるシンポジウムを8月20日(土)、オンライン形式で開催します(参加費無料)。詳細が決まり次第、ホームページなどでお知らせします。



チャリティ商品を購入する

ケニアの難民居住地に暮らす学生たちが描いたイラストが、AARのオリジナルフレーバードティーのパッケージになりました。お茶の専門店、株式会社ルピシアとコラボしたこの商品の名前は「TABASAMU(タバサム)」。スワヒリ語で「笑顔」を意味します。「世界難民の日」の6月20日発売開始です。



ご購入はこちらから



寄付で支援する

「難民の人たちのために何かしたい」。その想いを支援に変えて確実に届けます。継続的なご寄付、ご自身のタイミングでのご寄付など、さまざまな方法があります。平穏な生活を突然断ち切られた難民の人々の「これから」一緒に支えてください。

ご寄付はこちらから

特集
戦禍を逃れた人々のために

©Yoshifumi Kawabata

AARが支援するモルドバの学生寮に滞在するウクライナ難民の親子。撮影:川畑嘉文

編集部より

「ただお金を集めるだけでなく、難民の方の気持ちを想像して寄り添うことを大切にしたい」と募金活動を行った方から、ご寄付とメッセージをいただきました。困難な状況の人たちを思う温かいお気持ちに、私たちの活動は支えられていると実感する日々です。

AAR News

2022 Summer NO.479

次号は2022年10月上旬にお届け予定です。

特定非営利活動法人 難民を助ける会

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズホビル7F

Tel.03-5423-4511 Fax.03-5423-4450

www.aarjapan.gr.jp



AAR Japan

AAR ニュース 2022 夏号

p2-5 特集: ウクライナ緊急支援

p6-7 活動レポート: シリア国内避難民支援、令和2年7月・令和3年8月の豪雨

駐在員だより: ラオス

p8-9 特別インタビュー: ジェンナさん (NGO ゴスペル広場代表/ゴスペル講師)

p10-12 インフォメーション



AAR Japan

認定NPO法人 難民を助ける会



戦禍を逃れた人々のために

AAR が支援するウクライナ西部の修道院に身を寄せる親子とシスター

2月24日に始まったロシアのウクライナ軍事侵攻は、約1,400万人の難民・国内避難民を生み、第二次世界大戦後最大といわれる人道危機に発展しました。AAR Japan「難民を助ける会」は3月以降、隣国ポーランドからウクライナの国内避難民、モルドバでの難民への人道支援活動を実施しています。AARの取り組み、難民・避難民や関係者の声を現地から報告します。

※国境を越えて周辺国に逃れた人々を「難民」、国内の比較的安全な地域に残る人々を「国内避難民」と呼んでいます。



国内避難民への支援物資提供 ポーランドの修道会と連携

ウクライナ西部テルノピリ州の静かな村にたえずカトリックの修道院。2月末以降、激しい攻撃にさらされる東部・南部地域から逃れて来た母親と幼い子どもたちを中心に約80人が身を寄せています。また、ここはポーランドを目指す人々や近隣の避難者の拠りどころにもなっています。

AARは3月上旬、西隣ポーランドに職員を派遣し、ポーランド・ウクライナ両国にネットワークを持つカトリックの修道会と協力関係を結びました。

皆さまからお寄せいただいたご寄付をポーランド側の修道会本部に送り、テルノピリ州の修道院から何が必要か報告を受けたうえで、食料や医薬品、衛生用品、子ども用の服や靴などを調達して、週1回程度、車で陸路越境して現地に届けています。

母親のひとり「支援物資が届くと子どもたちも手伝って運びます。食事の支度や後片付けも皆で協力しています」と話します。約50人が子ども（乳幼児10歳前後）なので、AARは敷地内に遊具を設置した遊び場を設けたほか、パソコンを提供して小学生がオンライン授業を受けられるようにしました（写真上）。また、医薬品を備えた診察室、万一の際の地下シェルターを整備して、事態の長期化に備えています。

※AARは政治・思想・宗教的に中立な立場にあります。今回は信頼できる現地のパートナーとしてカトリックの修道会と連携しています。

ウクライナ国内への支援物資

- 食料（小麦粉、缶詰類など）
- 医薬品
- 離乳食
- 衛生用品（オムツ、生理用品など）
- 子ども用衣類・靴
- 避難している子どもたちがオンライン授業を受けるためのパソコン、プロジェクター
- 電化製品（洗濯機、電子レンジ、大型湯沸かし器、電気ケトル、掃除機など）



※その他、地下シェルターの工事費や大人数の食事を用意する調理人の人件費、母子たちが暮らす建物の暖房費なども支援しています。



「日本からの支援に感謝します」 シスター・ユリア（修道院長）



遠い日本から支援していただけたとは思ってなかったので、ここにいる誰もがとても感激しています。こうして日本や世界とつながっていることが、今の私たちにとって大きな支えです。修道院に届いた支援物資は、必要に応じて近隣に滞する避難民、地元の病院にも分配して喜ばれています。戦争が終わっても母子たちはすぐに帰れるわけではなく、長期的なサポートが必要です。日本の皆さんの温かいご支援に心から感謝いたします。

モルドバでの主な支援内容

■モルドバの首都キシナウ市内で難民の避難施設となっている学生寮、保養所、映画館の3カ所で食料支援を継続的に実施。調理用の食材のほか、温かい食事を提供している。



■学生寮に洗濯機、乾燥機、冷蔵庫、オープンコンロ、衛生用品などを提供するとともに、子どもたちが遊べるチャイルドスペースを開設。



■難民を受け入れている現地障がい者支援団体を通じて、車いすなどの補助具を提供。

■現地協力団体が運営する難民受け入れセンター5カ所で継続的に食料を支援しているほか、ベッドやマットレスなどの家具を提供。



「笑顔を取り戻しています」

ウクライナ南部の港湾都市オデーサ（オデッサ）出身です。自宅近くの軍事施設が攻撃され、3人の子どもたちを連れて逃れて来ました。

AARの食料支援がなかったら、私たちは町で食べ物を恵んでもらうしかなかったでしょう。あるいは危険を冒してウクライナに戻らなければならなかったと思います。本当に感謝しかありません。

子どもたちの安全を最優先に考え、しばらくはここに留まるつもりです。戦争のトラウマの症状を見せる子もいて心配ですが、きっと克服してくれると思っています。多くの子どもたちが、AARがつくったチャイルドスペースで遊んで笑顔を取り戻し、それを見ている私たちも笑顔になります。



スザンヌさん

「継続的な支援をありがとう」

難民を受け入れているキシナウの大学寮の寮長をしています。受け入れを始めた当初は、近所の住民に食料を提供してもらって何とか対応する状況でした。政府の支援もなく、たくさんの地元企業や団体に連絡して、Wi-Fiを設置してもらったり、食料を支援してもらったりしましたが、協力してくれたのはその時だけ。AARが継続的に食料支援をしてくれることになって心から安心しました。

モルドバに来た難民の多くは他の国に移っていましたが、残っている人たちはどこにも行く場所がありません。私たちはできる限りサポートするつもりです。



ディアナさん

希望をつなぐために



支援事業部長
久保田和美

私たちは今、信じられないような光景を目の当たりにしています。この間に失われたもの、壊されたものの大きさは計り知れません。家族や友人、地域とのつながり、家や学校、美しい街、安心して生活できる環境……それらを取り戻すには（取り戻せるとしたら）長い時間と膨大な労力が必要です。私たちにできることは限られています。私たちにできることは、周りに残ったウクライナの人々、国内に残る人々に寄り添い、国境を越えて逃れて来た難民を当り前のように支えようと奮闘するポーランドやモルドバの人々とともに、少しでも希望をつなげられるよう日々知恵を絞るながら支援を届けています。

ウクライナに国際社会の関心が集まる一方で、アフガニスタンやミャンマー、バングラデシュ、シリアなどの人道危機が解決したわけではありません。私たちは、東京と世界各地の現地事務所が連携し、AARというチームが一丸となって、一つひとつの課題に取り組んでいます。皆さまの温かいご支援は私たちの大きな力です。ウクライナをはじめとするAARの人道支援活動へのお力添えを重ねてお願い申し上げます。



AARが開設した子どもたちが遊ぶためのチャイルドスペース。左はAAR東京事務局の藤原早織



調理の必要がない温かい食事の提供が喜ばれています。右はAARモルドバ事務所の平出唯

ウクライナの南隣に位置する内陸国モルドバには、約10万人の難民が滞在しています。AARは難民の人々が暮らす首都キシナウと郊外の難民所に温かい食事と食材、洗濯機、冷蔵庫といった支援物資を届けています。モルドバの人々は献身的に難民を支えようと奮闘していますが、人口も経済規模も小さい同国は大量の難民を受け入れる体力はなく、AARのような国際NGOや国連機関が大きな役割を果たしています。

ウクライナ難民の際立った特徴は、女性と子ども、特に若い母親と幼い子どもたちが9割を占めることです。これはウクライナ政府が成人男性（18〜60歳）の出国を原則禁止したためです。母親たちにとって悩み事のひとつは、子どもたちが集まって遊べる場所がないことでした。そこでAARは学生寮の管理者と協力して、寮の一室をプレイルームとして開放し、人形やボードゲーム、車のおもちゃ、塗り絵、シャボン玉などを提供しました。母親のひとりには、子どもの様子を見守りながら「年齢が近い子どもがたくさん暮らしているのに、一緒に遊ぶ場所がなくてかわいそうでした。子どもたちは久しぶりに思う存分遊んでいます」と話しました。ウクライナ国内で連日、爆撃音を聞いていた子どもたちは、モルドバに避難した後、ドアの開閉や救急車のサイレンなどの音に過剰に怯えるなど、精神的ストレスを抱えています。子どもたちの心のケアや教育支援も今後の課題になっています。

モルドバに逃れた難民への支援 母親と子どもたちをサポート

ウクライナ緊急募金 郵便振込 00100-9-600

同封の払込用紙もお使いいただけます。
通信欄に「ウクライナ緊急」とお書きください。

AARの活動を継続して支えていただくマンスリーサポーターも募集しています



避難民
支援シリア国内避難民支援
1万人に週6日パンを配付

2011年のシリア危機勃発から11年。シリア国内で避難生活を送る人々は2022年6月現在670万人に上ります。長期にわたる紛争で国土が荒廃し、失業率も悪化する中、人道支援を必要とする人は2年前と比較で20%増加しています。



避難民が暮らすキャンプでパンを届ける現地協力団体の職員

AARは2014年から小麦粉、食用油など食料配付を実施し、2022年からは避難民キャンプの約2000世帯(約1万人)にパンを届けています。多くの世帯が女性と子どもだけで暮らし、働き手もおらず、AARが調査した世帯の半数が満足に食べていない状況でした。シリアの食事には平たいパンが欠

かせません。AARは現地協力団体を通じてトルコから小麦を運び、契約業者がパンを製造して、決まった場所週6日配付します。受け取りに来る女性のために女性スタッフを配置し、高齢者世帯にはスタッフが直接届けています。ウクライナ危機の影響で小麦の価格が上がり、シリアでも食料危機のリスクが高まっています。AARは生活用水の支援、地元農家への小麦栽培支援、新型コロナウイルス予防のための衛生用品の配付などを通じて、シリアの人々を支えています。

5人の子どもたちに食べさせています

オム・ラビさん

6歳から11歳の子ども5人を育てています。夫は6年前、空襲で亡くなりました。不自由のない暮らしだったのに、それからはとても苦勞し、今は避難民キャンプで暮らしています。

これまでは食料が買えず苦しい日々でした。私しか稼ぎ手がないのに、信じられないほどの値上がりで、パンさえ手に入れるのが難しくなりました。店も遠くて大変でした。

パンの配付のおかげで、1日に大きなパンを2つ、週に6日受け取っています。子どもたちにちゃんと食べさせ、必要な物を買うお金をとっておくこともできて、本当に助かります。AARの支援は私たちだけでなく、避難民キャンプにいるすべての家族を助けてくれています。



受け取ったパンを子どもと食べるオム・ラビさん

紛争などにより日本に退避してきた方々への支援を開始しました

AAR Japan [難民を助ける会] と姉妹団体である社会福祉法人さぼうと21は、母国の紛争・政情不安からの退避を目的として来日した難民・避難民の方々への支援として、緊急一時金を給付しています。ウクライナ、アフガニスタン、シリア、ミャンマーなどから来日した方で、日本到着から1年未満の方を対象としています。当プログラムへのご寄付のご協力を心よりお願い申し上げます。

▶詳しくはこちらをご覧ください(日本語・英語)

<https://aarjapan.gr.jp/news/5837/>

aar 緊急退避者支援プログラム

検索



ご寄付の方法: 払込用紙の備考欄に「在日難民・避難民支援」とご記入ください。HPからのご寄付は用途をご指定ください。

災害支援

令和2年7月・令和3年8月の豪雨
被災した施設の復旧支援が完了

2020(令和2)年7月の九州豪雨で被災した障がい福祉事業所「わいわい虹の村」(熊本県八代市)の運営再建支援が完了しました。

「わいわい虹の村」は浸水で作業所が全壊し、障がいのある利用者が行っていたパンの製造・販売ができなくなりました。資源回収(リサイクル)など他の活動もままならない状況でしたが、公的資金だけの再建は難

しく、AARはパン製造のための作業台や冷凍庫、ショーケースなどの機材、駐車場の整備、内装工事を支援。今年4月にパン工房が再開されました。

工房再開が決まった直後から「パンづくりの仕事をしたい」という障がいのある方々からの希望が増加。事業所の収入が増え、被災による借入金の返済の見通しが立ちました。利用者からは「新しく、明るくて、清潔な施設で働けて気持ちがいい」と喜びの声が届いています。

また、2021年8月の令和3年豪雨で被災した佐賀県武雄市、大町町の障がい福祉施設4カ所の活動再開支援も完了しました。障がい者の就労支援施設「葉菜」(武雄市)には、農業用機材や事務機器などを提供。施設スタッフの津山葉子さんからは「AARの支援で早期に被災以前とそう変わらない環境を整えることができて、安心して農作業に取り組むことができています」との声が寄せられました。



「また、パンづくりができて嬉しい」と喜びの声が届いています

精神面でも勇気づけられました

わいわい虹の村 施設長 高浜良春さん(写真後列左から二人目)

災害は誰にも等しく起こり得ますが、被災の度合いは生活力の差で変わってきます。障がい者施設は日頃から運営に四苦八苦しており、災害に見舞われた時は立ち直るのに大きな困難を伴います。今回のご支援は物質面でも助かりましたが、精神面でもとても勇気づけられました。温かいご支援に感謝申し上げます。



「わいわい虹の村」の皆さんとAARの生田目亮(前列中央)

駐在員だより

サクサク病みつき! 名物料理「チャカチャン」@ラオス

首都ビエンチャンから鉄道と車に揺られて6時間、ウドムサイ県パクベン郡の村に出張に行きました。ラオスでは人のつながりをとても大切にしています。多くの人々が家に集まって、料理やお酒を楽しみます。ラオスの料理は日本人にとって珍しいものも多く、中でも注目は名物料理「チャカチャン」。一体何だと思いませんか?



お昼はスタッフ揃っていただきます

村では子どもたちが長い粘着棒を持ってセミを取る風景がよく見られます。そのセミを蒸して、羽をとって塩コショウで味付けし、香草と煎ったシンプルな料理です。見た目は少し抵抗を感じますが、食べてみるとサクサクして病みつきになる美味しさ! ラオスでは高値で取引される貴重な食材です。他にもアリの卵やヤギの角など、地方特有の食事を楽しめることも出張の醍醐味です。



名物料理チャカチャン

AAR ビエンチャン事務所 峯島 昂佑

みねしまこうすけ

ゴスペルの歌声で 世界をひとつに

米国発祥の福音音楽として知られるゴスペルを楽しく歌いながら、開発途上国の教育支援、フェアトレード推進など国際協力に取り組むユニークな団体があります。2007年に設立されたNGO「ゴスペル広場」(東京都渋谷区)。代表を務めるゴスペル講師、ジェンナさんにゴスペルに懸ける思い、エネルギーな活動の原動力、「ゴスペル×国際協力」が目指すことについて伺いました。(聞き手…AAR東京事務局 長井美帆子)

を生きる力を得るのです。

葛藤を経て歌い続ける

「ゴスペル広場を始めるまでには紆余曲折もあったと聞きます。教会にとってゴスペルは伝道のた

めのもの。私は人と人をつなぐ音楽としてのゴスペルにひかれていきました。考え方の違いが次第に大きくなり、教会を離れ、一時ゴスペルからも離れた。その後、就職しましたが、取引先などとの雑談で、どうしてもゴスペルの話題になつてしまふんです。すると「自分も歌ってみたい」という人がすごく多かったです。そこで「ゴスペル×国際協力」を掲げ2008年にNGO「ゴスペル広場」を設立し、渋谷のスタジオを「ゴスペルスクエア」と名付けました。2年後には各地の支部「サニーサイド・ゴスペル・クラブ」を始め、現在は全国25カ所に広がりました。サニーサイドには、私が作った4カ条の心得があります。過ぎたことは忘れるべし、明日のことは神に任せるべし、我を忘れてゴスペルを歌うべし、明るい気持ちで家に帰るべし——というものです。

「国際協力×ゴスペル」

「とても素敵な言葉ですね。ところで、なぜ国際協力と結び付けたのですか。NGOゴスペル広場のキャッチフレーズは「楽しい時間のために使ったお金が、他の場所で大きな力になる」です。会費やイベント参加費の



NGO ゴスペル広場代表
／ゴスペル講師
ジェンナさん

自分のための「日常の歌」

「最初にゴスペルとの出会いを教えてください。

ゴスペルは米国で生まれたアフリカ系アメリカ人の教会音楽です。私が初めてゴスペルを知ったのは15歳の時、テレビで映画「天使にラブ・ソングを2」を観たことです。チーム一体となって全身全霊で歌う楽しさに目覚め、米軍横田基地内の教会で歌唱法や指揮法を学びました。

それまで歌は、映画やコンサートで上手な人が歌うもの、練習して誰かに聴かせるものだと思っていました。でも本物のゴスペルは、日曜日に教会で家族や隣人と一緒に祈りや感謝を歌に乗せ、神に向かって訴えるものでした。うまいも下手もなく、ただ自分のために歌う。礼拝が終わる時にはすっきりして、次の一週間



自ら主宰したゴスペルワークショップのメンバーと

ました。

毎年1回程度、AARの活動について説明していただいたり、ビデオで紹介してもらったりしています。ゴスペル広場のメンバーも、自分たちの支援が誰かの役に立っていることを実感でき、とても喜んでくれます。

ウクライナ危機でも、AARはすぐ行動してくれると信じていました。軍事侵攻直後の2月25日、緊急支援開始と募金呼び掛けのメールが届いた時は「来たー!」と思って、すぐにメンバーに転送しました。AARには、現地できちんと活動し続けてほしいとお願いするだけです。

く中、ミャンマー、アフガニスタンなど世界中で人道危機が相次いでいます。今、ゴスペルを通じて何ができると思えますか。

たくさんあります。今年新しいプロジェクト“Sing in Unity”(シング・イン・ユニティ)ひとつになって歌おう)を始めました。コロナ感染が始まって以降、オンラインで歌声や演奏を集めてひとつの作品を作る取り組みが広がりました。“Sing in Unity”は私が歌をつくり、世界中の人に歌声を送ってもらって、それをオンラインでまとめてリリース(発売)する計画です。

ゴスペルはキリスト教の宗教音楽なので、例えばイスラム教の人は歌うことができません。宗教や人種、ジェンダーを問わずに歌えるクワイヤー(合唱)音楽をつくりたいというのが、私が夢見ていたことです。フェイスブックで参加者を募集中で、すでに300人ほど会員がいます。

私は現在、ニュージーランドに住んでいるのですが、コロナ禍が始まってからワクチン推進派と反ワクチン派の分断を目の当たりにしています。私にできることは「一緒に歌おうよ」とみんなを結びつけることかなと考えています。何も知らない相手を批判するのは簡単でも、人間

一部を、国際協力のために寄付しています。これまでの寄付の累計は約3800万円になります。

もともとアフリカに興味があり、高校卒業後にワークキャンプに参加して西アフリカのトーゴを訪ねました。現地は驚くほど貧しく、おカネがなくて学校にいけないという話をたくさん聞きました。

居ても立ってもいられず奨学金プロジェクトを立ち上げましたが、おカネが集まらない。いろいろ考え、ゴスペルの講習会を開いて、その参加費を奨学金に充てることにしました。すると皆さん喜んでおカネを出してくれました。その時に「あ、私にできることはこれだ!」と。

奨学金支援の団体は多数あるので、自分は資金作り、ファンドレイジングを役割にしようと思ったのです。

信頼感があるから支援

「AARには2017年から寄付をいただき、ウクライナ緊急支援にもご協力いただいています。

6年ほど前、シリア難民問題をきっかけに支援を考え、難民支援団体についてインターネットで調べました。実際にAARの方から話を聞き、現地の声をよく聴いて活動していることが分かって、安心してAARを選び



支援しているスリランカの裁縫センターの女性たちと(2008年)

新プロジェクトにかける

「新型コロナウイルスの感染拡大が続

一緒に歌って平和に

「ゴスペル広場ではスタディーツアーを組んで、海外の支援先にも足を運んでいます。

自分自身、トーゴを訪ねた3週間で、人生が変わるほどの経験をしました。そういう経験をメンバーにもしてほしくて、支援先のカンボジアにもフィリピンにも、必ずメンバーを連れて行っていました。

私たちの活動理念である“Sing in Unity, Live in Peace”(ひとつになつて歌い、平和に生きよう)の通り、ゴスペルは一緒に歌った人をたちまち仲間にしてくれます。ピースには平和だけでなく、仲間との調和や心の平安の意味もある。私はこの言葉にすべてを込めています。ゴスペルとはつまり、そういう音楽です。

ウクライナ緊急支援へのご協力ありがとうございます

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻を受けて、避難を余儀なくされている方々への支援にたくさんの個人、企業・団体の皆さまよりご寄付をお寄せいただいております。温かいご支援に心より御礼申し上げます。皆さまのお気持ちを確実に現地に届けるため、最善を尽くして活動を続けてまいります。個人情報に配慮し、100 万円以上をお寄せいただいた企業・団体のみをご紹介します。

一般社団法人あおい福祉 AI 研究所	ゴールドマン・サックス	株式会社フレクシェ
アズワン株式会社	一般社団法人シェア基金	公益財団法人毎日新聞大阪社会事業団
一般財団法人アース エイド ソサエティ	一般社団法人 Think The DAY	公益財団法人毎日新聞西部社会事業団
IMS グループ	創価学会	公益財団法人毎日新聞東京社会事業団
一般財団法人 IMS 国際医療支援機構	日本郵船株式会社	株式会社ミリオンインターナショナル
エーザイ株式会社	パルシステム生活協同組合連合会	UBS グループ
NTT 労働組合	合同会社 FISHERMAN	霊友会
きょうざれん	富士貿易株式会社	

(2022 年 6 月 13 日時点、50 音順)

東京・紀尾井ホールでチャリティコンサート 戦禍の人々に思いを馳せて

「ウクライナ避難民のための緊急チャリティコンサート」を 5 月 18 日に開催しました。ピアニストの佐藤卓史さんが、得意とするシューベルトやショパンに加え、ウクライナで撮影された映画「ひまわり」のテーマ曲などを演奏したほか、特別ゲストのソプラノ歌手・田中彩子さんが美しい歌声を披露しました。ウクライナから日本に避難しているチェロ奏者のラブロヴァさん母娘も演奏し、満席に近い 700 名を超える聴衆の感動を誘いました。佐藤さんからは「このような形で支援に関わることができて誇りに思います。多くの方がそれぞれの立場で、苦しむ人々に手を差し伸べることでできる世界になることを願っています」とのメッセージが寄せられました。入場無料の本公演の会場にて募金呼び掛け、351 万 2,409 円が寄せられました。大切に活用させていただきます。



ピアニストの佐藤卓史さんとソプラノ歌手の田中彩子さん

※東京都が定める新型コロナウイルスの感染防止策を徹底して開催しました。

立命館宇治中学・高校の皆さんが募金活動 「支援の輪を広げていきたい」

立命館宇治中学校・高等学校（京都府宇治市）の生徒の皆さんが、ウクライナ難民などへの支援を呼びかける募金活動を実施し、30 万 7,595 円を AAR にお寄せいただきました。中学・高校の皆さんは「難民となった人々をひとりでも多く救いたい。自分たちで今できることをしよう」と考え、募金活動を行ったほか、平和を願う思いを伝えるイベントを開催し、その様子を YouTube 上で発信しています。活動に参加した皆さんからは「私たちが現地で直接支援することは難しいですが、声を上げて思いを発信し、関心を持つ人を増やすことはできます。支援の輪を広げることになれば嬉しいです」などのメッセージが AAR に届いています。



平和を祈念するイベント「キャンドルナイト
平和へのメッセージ」を校内で実施

領収証発送の遅れをお詫びします

ウクライナ緊急支援にたいへん多くのご寄付をお寄せいただいております。それに伴い、ご寄付の領収証発送作業に通常よりもお時間をいただいております。皆さまにはご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

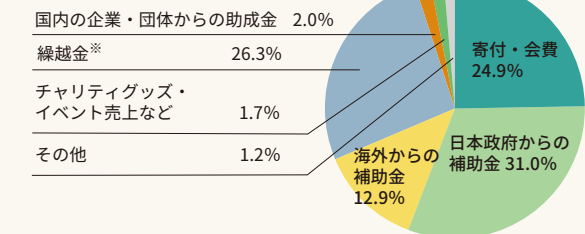
2021 年度会計報告 2021 年 4 月～2022 年 3 月

2021 年度は、日本国内外の皆さまから 4 万 2,877 件の温かいご支援をいただきました。日本を含む 16 カ国で 34 事業を実施し、528 万 3,019 人の方々に直接支援を届けました。前期繰越金を除いた収入合計額は約 14 億 2,300 万円、支出は海外での支援活動に約 9 億 7,200 万円を、国内での支援活動には約 8,626 万円をそれぞれ充てました。

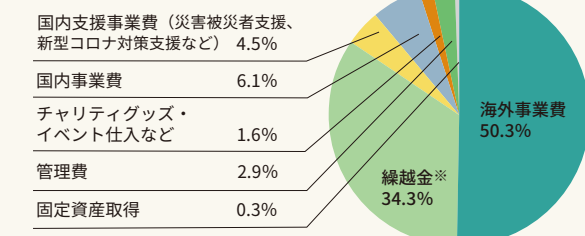
収入	1,931,350,420円	支出	1,931,350,420円
寄付・会費	480,065,284円	海外事業費	972,082,476円
日本政府などからの補助金	597,841,566円	国内支援事業費 (災害被災者支援、新型コロナ対策支援など)	86,266,501円
国内の企業・団体からの助成金	40,320,124円	国内事業費 (上記支援事業を除く)	116,983,915円
海外からの補助金	248,638,754円	チャリティグッズ・イベント仕入など	30,014,227円
チャリティグッズ・イベント売上など	33,052,211円	管理費	57,443,789円
その他	23,578,686円	固定資産取得	5,619,616円
前期繰越金*	507,853,795円	次期繰越金*	662,939,896円

※活用期間が年度をまたいだ助成金・補助金で、既に使途の決まっている資金が含まれています。

収入



支出



2021 度の活動は年次報告書（2022 年 8 月末発行予定）で詳しくご報告します。

ご希望の方は以下のいずれかの方法でお申し込みください。

▶ AAR ニュース夏号に同封するお申し込み用紙 ▶ お電話（03-5423-4511） ▶ ホームページのお問い合わせフォームより

2022 年夏募金 難民の方々が安心して過ごせるように

6 月にお送りした夏募金のお願いに対し、皆さまから温かいお気持ちとメッセージを多数お寄せいただいております。心より御礼申し上げます。武力衝突や政情不安などによって、世界には 1 億人を超える難民・国内避難民が、終わりの見えない苦難のなかで支援を必要としています。彼らが少しでも安心して過ごせるよう、引き続きのお力添えをお願い申し上げます。



モルドバの首都キシナウの学生寮に滞在する
ウクライナ難民の親子

「まるごとプロジェクト募金」ご協力の御礼

AAR がパキスタン、カンボジア、タジキスタンで実施するプロジェクトの資金を一括でご寄付いただく「まるごとプロジェクト募金 2022」は、すべてのプロジェクトへのご寄付が決まりました。ご協力に感謝申し上げます。子どもや障がいのある方々のために大切に活用させていただきます。

— プロジェクト一覧 —

パキスタン：山奥の女子小学校の環境整備
カンボジア：バリアフリートイレの設置と地域の啓発
タジキスタン：障がいのある女性や障がい児家族の生計支援



タジキスタンの女性が開業するための
ミシンを提供